

形物香合番付表

[illegible]

【形物香合】

＝形物香合とは＝

形物香合の定義を考えると、二通りの内容が見られる事がわかる。一つは一定の型で打出して作られたもの、すなわち文字通り型物の香合ということ、例えば交趾類の大半がそうであるように、一つの項目のものは身も蓋も同じ型で作られているので、その身、蓋を取替えてもぴったりと合うということになる。これに対しても一つの方は形物とはいっても同じ型で作ったものではなく、一つの主題で同じ傾向のものを作り、これを総称しているというものである。例えば青磁「桃」といえばどれも類似した桃の形をしているが実は、同一の型で作ったものではないため、当然身蓋を取り換えると出合わないことになる。これが頭取にある和物になるともっとその現象はあきらかである。

=番付の成立=

この番付がいつ頃制作されたかは、今のところわかってはいない。ただこれ程の人気を得た番付がどうして明らかでないか不思議ではあるが、確実なことは、その制作年次で一枚摺りの右肩に「安政二年卯」とあることからはっきりしている。成立の確証がないので結局聞き伝えによるよりしかたないのあるが、「当時茶の湯盛行の名古屋を中心として、数寄者の茶道具商人などが寄合い談合の上で作ったもので、尚万全を期するために京、大坂、江戸の茶道具商や数寄者の意見も聞いて歩き、刊行の運びに到ったものである。という風に伝えられている。しかし名古屋で聞くと京阪の方で出来たのではないかと言われ、全く番付当初のことはわからない。」と伝えられている。そこで取りあえず考えられることは、

一、少数の人々では完成できるものではなく、それも一地方の見識では到底果たせない所業であること。

一、京阪か名古屋かは別として東西寄合って数日を要して練りに練って出来上がったものと推測される。

一、相寄った人々は茶道具商、すなわち目利きの定評がある人々であったと思われ、このことは各種の位づけだけではなく、頭註までつけていることでもわかる。

＝番付の編成＝

まずその内容であるが、種類と数量は次の通りである。

染付 八四、交趾 六四、青磁 二九、祥瑞 一九，吳州 一八，宋胡錄 二，
紅毛 二、織部 二，庸軒好 二，南蛮 一，寧波染付 一，伊賀 一，黃瀬戸 一，
志野 一，仁清 一，乾山 一，直齋好 一，合計二三〇種類 他に世話人二五種

これらの編成の仕方は実に巧みであって、以上の各種を程よく東西に配在させている。その法則は交趾は東、染付は西を原則とし、青磁と祥瑞は、西のみ最上段にあり、二段目以下は東西に配分されて東西の数量が調整されている。感心するのは中央にある行司・頭取・勸進元の欄で、この番付の盲点である和物や茶匠の好み物、そして紅毛などと本題に漏れたものを巧みに補足している。

ところで、問題になるのが番付に出てくる名称のものが実際にはどのような形のもの
を指しているかと言うことで、大半は判別できるものの、一部には曖昧なものもあり、
また一つの名称の中に多少の変形や、形違いのものがあったり、まったく名称のみで今
日実例を挙げれないものも若干含まれているのである。

さて、この番付の上位と下位はどのようにして位付けされたのであろうか。一応次のようなことが基準になったと考えられる。

一、上位のものは、唐物本来のもの（茶道具として日本から注文したものではないという意味）が多く、下位のものに日本から注文したものが多い。その証拠に祥瑞などは人気の高い割に最上段位にはなく、二段目以下に位置している。

一、概して上位のものは格調が高く、鑑賞に価するものが多い。

一、上位のものは平均して数量も少なく、それだけ貴重視されている。

一、下位のものは時代の下がるものも多く、寸法も大小まちまちで、総じて品格に乏しい。